

1 教科領域研究テーマ

生徒の学びを深める題材構成の工夫 ～教える授業から学び合う授業へ～

2 研究テーマ設定の理由

コロナ禍で校内の音楽活動の制限が長引く中で、音楽をごく自然にみんなで楽しむことは、やはり学校でしかできないことであると子どもたちは気付いたことであろう。制限が解除されていく中で、多くの子どもたちが音楽を通じて人と繋がることの楽しさを改めて実感できたのではないと思う。音楽科の学習は、他者との関わりの中で行うことを大切にしている。それは、合唱や合奏によって一つの音楽を創り上げることだけに留まらない。生徒一人一人が自らの考えを他者と交流したり、互いの気付きを共有し、感じ取ったことなどに共感したりしながら個々の学びを深める。そして、音楽表現を生み出したり、音楽を評価して良さや美しさを味わって聴いたりすることが求められている教科である。協働することで、互いの思考や技能の質の向上を目指している。

また、音楽科の学びには、音楽そのものの知識や技能を身に付けることの他に、「心」の力を育む重要な役割があると考え。生徒一人一人が主体的に演奏しながらも、周囲の音を聴きながら合わせて演奏しようとする思いやりや協調性、楽曲を演奏するためには繰り返し粘り強く練習する忍耐力や自分の感情をコントロールしながら演奏を最後までやり抜く集中力も必要である。このように、音楽の学びを通して育まれる「非認知能力」は、これからの時代を生き抜くすべての子どもになくてはならない汎用的能力であり、学校音楽教育はその育成のための大きな一翼を担っていると言える。このような学習を通して、子どもたちはまさしくウェルビーイングの実現に向けて豊かな人生を送るために必要な資質・能力を身に付けることができる。

そこで、持続可能な形で音楽科を未来に残していくためには、教師自身が意識改革を行い、生徒主導の学び合う授業づくりへと変革していかなければならないと考えた。これまでの研究の成果を継承しつつ、子どもたちの問いを中心とした授業展開を実施し、「こう表現したい」という自分の思いや意図を持ち、音楽を媒体として試行錯誤しながら他者と意見交換・議論させたい。そして、自分と他者の思いや意図の折り合いを付けて曲にふさわしい音楽表現を創り上げていくような題材構成を工夫すれば生徒の学びが深まると考え、本研究テーマを設定した。

3 具体的な研究内容・方法

(1) 音や音楽との出会いや学習課題の設定の仕方についての工夫

生徒の問いや気付き、深めたいという思いなどの課題意識を生かした学習活動を工夫することで、生徒が学習の方向性やゴールを意識し、主体的に学ぶことができるようにする。

(2) 音や音楽で交流し、感じ、考える学習活動の工夫

学級への安心感や信頼感を高め、音や音楽及び言葉でコミュニケーションを図る場面を適切に位置付けられるよう指導を工夫し、思いや意図などを相互に伝え合うことで音楽的な見方・考え方を広げ、音楽の意味や価値を自覚できるようにする。

(3) 題材構成と学習の振り返り、評価の計画についての工夫

指導と評価の一体化を図り、題材同士の関わりを明確にすることで、生徒が自身の学びの過程や成果を自覚して、主体的に学習できるようにする。

4 校内授業計画

○「自分たちの思いを混声合唱の豊かな響きで表現しよう」

(混声三部合唱「Chessboard」3年, 7月, 三棟)

(混声四部合唱「遠い空の下で」3年, 11月, 三棟)